

後期研修プログラム概要

東大阪市立総合病院は地域の中核病院として、職員一同、毎日の診療にあたっております。平成 16 年度から始めました「新研修医制度」にあたり、毎年 8 名の初期研修医を採用し（2 名は大阪大学との禊がけ）、研修医教育に各科・各部門が積極的に取り組んでいます。平成 19 年度からは奈良医科大学との禊がけとして、さらに 2 名の研修医を受け入れる予定で、計 10 名の初期研修医が着任することになっております。

後期研修医の公募を平成 19 年度から開始し、初期研修で培われた診療知識・技術から発展し、より専門的な医療を習得することができる研修施設として運営することといたしました。意欲のある将来を担う人材の応募を期待しております。

内科系（全体として） 後期研修プログラムの概要

《消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、神経内科、腎内科、血液内科、内分泌代謝内科》

当院の内科系診療科は上記の 7 科があります。初期研修では短時間の研修期間であったため、より専門的なより高度な医療を十分に経験することができなかつたと思います。後期研修では専門 7 科のうち、いずれか 1 科を希望していただきます。一般内科だけでなく、専門的な診療医となる基礎教育を受けていただくこととなります。

内科系は診断学が基本となりますので、専門研修と同時に、救急医療（当番制）を担当していただき、初期診断、初期治療の診療レベルのさらなる向上に努めていただきます。

循環器科 後期研修プログラムの概要

●スタッフ、設備

当科は院長以下 8 名（常勤医 7 名、後期研修医 1 名）の構成で人材は大阪大学循環器内科より供給されてきました。心臓専用アンギオ装置、心筋シンチ、64 列冠動脈 CT を有し、循環器専門医の教育に万全の体制です。

●研修の目標

トータルに循環器病患者を診る能力を身につけること。検査技術としては心エコーなど基本的検査の習熟、診断カテーテル検査がハウプトとして遂行できる能力を養うことです。

●平成 18 年度の診療実績

平成 18 年 4 月から平成 19 年 3 月までの当科の診療実績を示します。

心臓カテーテル検査総数は 723 例（診断 CAG 373、POBA 41、Stent 198、DCA 4、血栓吸引 15、血栓溶解 1、Cutting balloon angioplasty 8）であった。PTA 40 例（POBA 7 例、Stent 33 例）、IVC filter 留置 9 例（一時的 8 例、永久 1 例）、Pacemaker 植込み 23 例（新規 13 例、バッテリー交換 10 例）であった。心筋シンチ総数は 565 例（その中で負荷心筋シンチ 431 例）、心エコーは経胸壁が 4562 例（181 例は病棟ベッドサイドで施行）、経食道 44 例、Treadmill exercise test 414 例、Master 負荷心電図 88 例、ABI 904（211 例は人間ドック）例、Holter ECG 527 例であった。64 列 multislice CT による冠動脈 CTA は 222 例と前年度に比し 2.5 倍と増加。受け入れた急性心筋梗塞（AMI）患者数は 36 人（救急搬送数 26 人、院内死亡数 2 人）と減少傾向。平成 16 年 8 月に本邦で使

用可能となった薬剤溶出性ステント sirolimus-eluting stent (SES)のため再狭窄が激減し、いわゆる follow-up カテが減少し、総カテ数も減少。冠動脈 MDCT の導入と心筋シンチで外来レベルでの診断能の向上があり、診断目的の心カテ入院は減少した。PCI 数は横ばいで、総カテ数の約半分が何らかのインターベンション治療となっている。昨秋 PET 設置工事のため RI 検査は約3ヵ月中断となり前年度より件数は減少している。当科は循環器病学の進歩に貢献すべく学会活動を積極的に行っている。学会発表は 21 演題であった。その内訳は日本循環器学会総会 1 題、日本心臓病学会総会 3 題、日本インターベンション学会総会 1 題、日本心不全学会 1 題、日本冠疾患学会総会 1 題、国際高血圧学会 1 題などである。今後は冠動脈のみならず下肢動脈、腎動脈などの血管形成術を積極的に行いたいと考えています (いわゆる whole-body vascular intervention)。

消化器科 後期プログラムの概要

当院は日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本肝臓学会の認定施設になっています。消化器科は現在 4 名の常勤医と 5 名のレジデントで肝炎、肝癌を主とした肝疾患の診断・治療、消化管の内視鏡処置・治療を中心に、消化器の内科疾患を良性から悪性まで幅広く扱っています。年間の新規入院患者は 1500 例、腹部超音波検査は約 5500 件、上部消化管内視鏡検査は約 5000 件、大腸内視鏡検査は約 1500 件と症例数も豊富で、肝臓領域、消化管領域の疾患バランスも良くとれています。放射線科との協同も緊密です。肝生検、ラジオ波焼灼療法、経カテーテル的動脈塞栓術、食道・胃静脈瘤の内視鏡的硬化・結紮療法、消化管出血の内視鏡的止血術、内視鏡的粘膜下剥離切開術、粘膜切除術、ポリープ切除術、内視鏡的異物除去、経皮的内視鏡下胃瘻造設術、超音波内視鏡検査、総胆管結石の内視鏡的除去、閉塞性黄疸に対する経皮的または内視鏡的胆道ドレナージやステント挿入、イレウス管挿入など消化器病臨床に必要な手技を経験、習得できます。

呼吸器科 後期プログラムの概要

● 診察内容の概要

呼吸器内科として、肺癌、肺炎、気管支喘息、COPD (慢性肺気腫、慢性気管支炎)、肺線維症などのびまん性肺疾患などを中心に、呼吸器に関する疾患の診断、治療を専門的に行っております。

特殊検査としては、気管支内視鏡検査、気道可逆性検査、精密肺機能検査を行っております。また、呼吸困難のある方には、包括的呼吸リハビリテーションも、入院していただきクリティカルパスを導入し行っております。

● 検査の実際

気管支内視鏡検査・・・最新の電子スコープを用い、直視下、透視下に肺の生検を行い、肺癌の確定診断を行います。びまん性肺疾患である間質性肺炎 (好酸球性肺炎、過敏性肺臓炎、BOOP)、サルコイドーシスに対して気管支肺生検や気管支肺胞洗浄を行い、診断を行っております。

● 精密肺機能検査

COPD、気管支喘息の診断には欠かせない肺機能検査を、肺拡散能検査にいたるまで精密な検査方法で診断しております。

● 治療の実際

肺癌・・・全世界で最も標準的な抗がん剤の組み合わせによる治療を中心に、放射線治療との併用、内服抗がん剤、外来通院治療を行っております。また、手術適応症例に関しては、呼吸器外科とのすばやい連携で対応しております。

気管支喘息・・・気管支喘息ガイドラインに基づき、吸入ステロイド中心の治療はもとより、QOL（生活の質）の向上にいたるまで、きめ細かい治療を行い、日本での喘息死ゼロを目指しております。

COPD（慢性肺気腫、慢性気管支炎）・・・全世界共通のガイドラインに基づき、吸入療法を中心とする治療や、入院による包括的呼吸リハビリテーションの導入、また、重症呼吸不全に対して在宅酸素療法を積極的に取り入れ、QOLの改善に努めております。さらに、呼吸器身体障害者認定書類の作成を行っております。

	専門分野
久保裕一	気管支喘息、COPD
池田昌人	肺癌
北口佐也子	気管支喘息、びまん性肺疾患
團野 桂	一般呼吸器
吉村真奈	一般呼吸器

神経内科 後期プログラムの概要

スタッフは常勤医2名、レジデント2名の計4名。病床数 22床。患者数（平成18年度実績）年間入院患者数 8,649人、年間外来患者数 8,095人。疾患別入院患者数は、血管障害（脳梗塞 97、脳内出血 13、TIA 3）、神経変性疾患（パーキンソン病 24、多系統萎縮症 12、運動ニューロン疾患 23）、神経免疫疾患（ギランバレー症候群 3、CIDP 2、多発性硬化症 16、ADEM 1）、感染症（脳炎 5、髄膜炎 15、プリオン病 1）、機能的疾患（てんかん 7、良性発作性頭位変換性眩暈 8）、その他、代謝性疾患等に伴う脳症 13、末梢神経疾患 7、ミオパチー 8、脊椎疾患、一般内科疾患等。

当科の診療内容は大きく二つに分けられます、すなわち、救急指定の“市立”病院の内科の1部門として急性疾患の脳血管障害（tPAによる血栓溶解療法や脳血管造影を含む）、脳炎や機能的疾患に対応することと、中河内地域の神経内科の中核病院として神経内科特有の神経免疫疾患や神経変性疾患等の診断から一貫した治療を行うことです。後期研修ではその何れも診療できるようになるように研修してもらいます。とくに神経変性疾患に関しては、神経難病の代表である筋萎縮性側索硬化症患者の東大阪市保健所管轄24名中、60%強の15名が当科にて加療されていることからわかりますように、近隣に入院施設をもった神経内科がないこともあり、当市のみならず八尾・大東地区の神経難病患者診療のセンター的役割を果たしており、慢性疾患である神経難病と急性期疾患である脳血管障害の双方をバランスよく診療したい研修医の方に当院での研修をお勧めします。また、当院が阪神高速の出口からすぐのこともあり、例えばよく研究会のある梅田へ夕方でも車で20分で到着できることもあり、学会や各種の研究発表も積極的に行っており、academicな面でも充実しています。

腎内科 後期研修プログラムの概要

当院腎内科は、4名の常勤医が在職しております。日本腎臓学会、日本透析医学会の指導医がおり、各学会の教育病院と認定されております。また、関西一円の腎内科医との交流も深く、研究会や学会にも積極的に参加し、診療技術の研鑽に取り組んでおります。

腎炎ネフローゼから腎不全透析医療まで、様々な腎疾患症例を担当しておりますので、多くの症例を経験することができます。腎生検組織診断においては近隣腎専門施設からの診断依頼を多数受けており、腎組織診断のエキスパートを目指すことができます。透析室には15台の透析ベッドがあり、年間60～

70名の透析導入患者があります。血液透析だけでなく、血漿交換法など様々な血液浄化法を駆使して、他科疾患の治療にも協力しております。腎内科に配属されましたら、腎疾患の診断治療だけでなく、体外循環法による治療法も併せて習得していただきます。

血液内科 後期研修プログラムの概要

当院血液内科は、2名の常勤医が在職しており、日本血液学会の指導医がおり、同学会の教育病院に認定されています。入院患者数は25～30名で、東大阪ほぼ全域からの紹介患者を担当しています。そのため、白血病や悪性リンパ腫などの悪性疾患はもちろんですが、さまざまな貧血、血小板減少、出血性疾患など多様な病態を経験することが出来ます。また、専用の無菌室が1床、準無菌室が4床あり、急性白血病の寛解導入、自己末梢血幹細胞移植など、癌化学療法とその支持療法について経験を積むことが出来ます。

内分泌代謝内科 後期研修プログラムの概要

当院内分泌代謝内科は、3名の常勤医が在職しており、日本糖尿病学会認定教育施設となっています。入院患者数は約20名で、糖尿病を主体とした各種代謝疾患及び内分泌疾患を担当しています。近年急増している生活習慣病の代表的疾患である糖尿病の薬物治療・合併症評価について習得することが可能です。また糖尿病教室の講師を担当していただくことにより、患者教育についての経験を積んで頂きます。更に手術・妊娠等で他科受診中患者の血糖管理依頼も多く、種々の急性期疾患における代謝管理についても経験することができます。機会があれば症例報告等で学会活動も経験していただきます。

小児科 後期研修プログラムの概要

小児科は7名の専門医を含む8名の小児科常勤医により構成され、日本小児科学会認定小児科専門医研修施設、日本血液学会認定教育施設、日本周産期・新生児医学会指定研修施設です。

小児科病棟は43床、NICU6床を有し、時間内外来患者数は1日約100名、年間約1500名の新入院患者があり、時間外救急外来受診患者数は約20000名/年、救急搬送患者数約1000名/年です。年間約60名の新入院患者を受けるNICU及び約600名/年の院内出生新生児の診療を行っています。

午前中の一般外来に加え、午後の特設外来は新生児検診発達外来、予防接種、血液外来、アレルギー外来、腎臓外来、心エコー外来等を行い、それぞれの専門医が担当しています。

救急中心の市立病院のため、呼吸器、消化器、痙攣疾患といった急性感染症が大部分ですが、白血病、脳腫瘍といった悪性腫瘍から、循環器、腎、神経、代謝、血液疾患、外科的疾患と極めて多彩です。また血液外来では100名以上の血友病、von Willebrand病、血小板無力症といった比較的希な小児出血性疾患患者を治療観察中です。

それぞれの専門医の指導下に極めて多数の多彩な疾患を経験する事により、一般小児疾患及び小児救急医療に必要な知識、診療技術を十分に習得していただけるものと考えます。

外科 後期研修プログラムの概要

当院の外科は消化器外科、乳腺内分泌外科、呼吸器外科、小児外科、一般外科が中心で、中河内医療圏（約80万人）における唯一のがん診療連携拠点病院の外科として悪性疾患の外科診療を重点的に行っています。一方で地域の中核病院として胆石症、ヘルニア、虫垂炎、イレウスなどの良性疾患や救急疾患も多く、5大癌（胃癌、大腸癌、乳癌、肺癌、肝癌）までもバランスよく経験でき後期研修が終了

するところにはこれらの手術の執刀医になれるような教育指導を行っています。腹腔鏡、胸腔鏡手術についても症例数が多く、経験豊富な外科医が丁寧に指導します。

当院は大阪大学外科学講座の連携施設であり、心臓血管外科疾患の経験や後期研修終了後の進路についても大阪大学の専門医育成プログラムを活用していただけます。

平成 18 年度の診療実績を紹介します

全手術数は 1025 例（全身麻酔 767、腰椎硬膜外麻酔 129、局所麻酔 101、ポリペクトミー 28）（予定手術 911 例、緊急手術 1142 例）で、術後在院死が 9 例(0.88%)あり、その中で術後 30 日以内の手術死亡は 5 例 (0.49%)でした。術後再手術は 8 例で予定手術例の 0.88%でした。1 日平均の外来患者数は 118 人、総入院患者数 1377 人で、入院目的別には手術が 922(67.0%)、保存療法が 149(10.8%)、終末期 65(4.7%)、緩和 21(1.5%)、検査が 16(1.2%)、化学療法 186(13.5%)、放射線化学療法 16(1.2%)、放射線療法 21 (1.5%) でした。病床稼働率 82.2%、平均在院日数 16.2 日でした。

手術例を示します。

上部消化管／食道癌 8 例、胃癌 95 例、十二指腸潰瘍穿孔 16 例 **下部消化管**／大腸癌 84 例、直腸癌 50 例、入院ポリペクトミー 28 例 **呼吸器**／肺癌 28 例、気胸 11 例、縦隔腫瘍 5 例 **肝胆膵**／肝切除術 11 例（原発性肝癌 2 例、転移性肝癌 6 例、肝内胆肝癌 0 例、胆嚢癌 1 例、肝内結石症 1 例、肝内胆管狭窄症 1 例）膵頭十二指腸切除術（膵癌 4 例下部胆肝癌 7 例、十二指腸癌 1 例）腹腔鏡下胆嚢摘出術 87 例、開腹胆嚢切除術 6 例、総胆管石切術 13 例 **内分泌**／甲状腺癌 9 例、甲状腺腫 8 例、乳腺手術 92 例（43.5%に温存手術） **小児外科**／鼠径ヘルニア 101 例、臍ヘルニア 6 例、虫垂炎 12 例、腸重責 10 例、腸回転異常、胆石症、ロート胸、メッケル憩室、横隔膜ヘルニア各 1 例 **緊急手術**／114 例（虫垂炎 48、ヘルニア陥頓 7、消化管穿孔 16、腸閉塞 16、術後出血 3、気胸 4）

レジデント 2 名のうち 18 年度の後期外科研修医は 1 名ですが、20 年度は 1～2 名の公募を予定しています。毎日朝 8 時からの morning conference に始まり、月水木金の手術、火木の内視鏡検査、毎日の外来病棟勤務と忙しいですが、10 名の常勤医の指導の下で手術症例数が豊富な東大阪で、外科医としての第 1 歩をスタートしてみませんか？

産婦人科 後期研修プログラムの概要

当科は常勤医 5 名と後期研修医 3 名の 8 人体制で臨床を行っております。後期研修医の内訳は、当院で前期研修を行った 1 期生 1 名と 2 期生 2 名です。

常勤医のうち 4 名は、日本産科婦人科学会認定医・日本産科婦人科学会卒後研修指導医・母体保護指定医の資格を有しており、卒後研修指導施設ならびに日本周産期・新生児学会の専門医研修施設に指定されております。

産婦人科病棟は 51 床で、外来患者数は 1 日平均 150 人で年間延べ 34549 名（18 年度）、入院患者は延べ 15178 名（18 年度）の診療を行っております。

外来の特徴としては、他科との境界領域に関する特殊外来の設置と助産院等も含めた病診連携体制の充実です。特殊外来に関しては、腫瘍外来・瘦身外来・美肌外来・骨粗鬆症外来・ホルモン外来・検診結果外来を開設しており、外来化学療法も積極的に行っております。

年間分娩数は 800 件前後ですが、大阪府の周産期情報システム（OGCS）に加入していることもあり、約 4 分の 1 は他院からのハイリスク紹介患者です。

紹介患者のほとんどが帝王切開になったこともあり、昨年度の帝王切開数は326件（うち緊急87件）と、とんでもない件数になってしまいました。

婦人科手術に関しては、婦人科悪性腫瘍手術48件と良性手術193件で、1年間の総手術件数は567件でした。

後期研修プログラムとしては特に作成していませんが、1名の指導医によるマンツーマン指導を原則としています。ちなみに1期生の1年間の手術件数（執刀）は189件で、分娩取扱件数は108件でした。現在、2期生2名の集中指導中です。

今後、周産期センターならびに癌拠点病院としての機能を充実させるべく優秀な人材を育てていきたいと思っています。

麻酔科 後期研修プログラムの概要

当院は日本麻酔科学会の認定施設です。スタッフは学会認定指導医2名、専門医1名を含む計7名で、マンツーマンで指導しています。集中治療部（4ベッド）の管理もしています。

麻酔科管理症例数は年間2600例前後で、重度の合併症を持つ患者さんが多いのが特徴です。緊急手術も年間420件と多く、ありとあらゆる病態の患者さんを扱っています。

「痛くない快適な術後」の実践として、持続硬膜外麻酔やIVPCAを多用しています。関連の臨床研究も継続的におこなっています。後期研修では、一人でAライン、CVラインなど各種モニタリングができ、挿管困難はじめ、重症患者さんの麻酔管理ができることを目標にしています。

集中治療部では年間350名前後の重症患者管理を、関連各科と協力して行っています。人工呼吸、PCPSやIABPを含む循環管理、CHDFや血液浄化も盛んに行っています。

放射線科 後期研修プログラムの概要

当院にはComputed Radiographyによる単純X線撮影装置、X線TV装置（3台）、超伝導MRI（2台）、CT（MDCT1台、ヘリカルCT1台）、血管造影撮影装置（DSA2台）、CTシミュレーション治療計画によるリニアック放射線治療装置、核医学装置（ガンマカメラ2台、PET1台）など最先端のモダリティーが整備されています。画像は全てPACS（Picture Archive and Communicating System）に保管され、読影端末上で一括して観察できるシステムになっており、精度の高い放射線診療が行える環境にあります。スタッフは放射線科専門医5名で、各種画像診断、IVR（Interventional Radiology）、放射線治療をそれぞれの専門性を生かして診療に従事しており、現在後期臨床研修医1名が研修を行っています。

今日の医療の中で、放射線医学の役割は重要な位置を占め、その活動範囲も多岐にわたっています。卒業後2年間に課せられている研修期間では、その知識や手技の概要を把握することすら非常に難しく、その習得にはより専門的な研修が必要となります。後期研修は前期研修の選択科として挙げた以下の研修目標の実質的な達成を目指します。

1. 各種画像診断の特徴と適応に関する知識の習得
2. 主要疾患の典型的画像所見の理解
3. 各種画像診断の検査手技の習得
4. IVRおよび放射線治療の適応に関する知識と手技、施行手順の習得

後期研修で画像診断の適応と読影のポイント、およびIVRや放射線治療の適応に関する知識や手技を習得して、今後の医師としての活動に役立てて下さい。

整形外科 後期研修プログラムの概要

整形外科の診療は大きく3つに分けられます

- (1) 骨折等の外傷
- (2) 関節外科（膝、股関節等の人工関節、足の外科）
- (3) 脊椎外科

特に当院では、足の外科及び脊椎外科疾患に力を入れています。

後期研修では、上記3つの柱の診療能力を身につけること、及び外傷等の手術から始め、3年間で一通りの手術の執刀をしていただきます。

後期研修が終わった時点で、日本整形外科学会専門医の受験資格に必要な症例は経験できるようになると思われます。

特に脊椎外科領域の検査の脊髓腔造影、神経根造影に関しては、他の研修施設に比べ圧倒的な質と量があり、specialistの領域に達することが可能です。

学会活動も積極的で、後期研修医には年に2-3回程度の学会報告をしていただけたと思います。

《平成18年度の現況》

スタッフは常勤医6名(専門医5名) 病床数 53床

外来患者数は1日平均約102名

手術件数 620例：観血的整復固定術 149例、脊椎外科手術 125例、人工関節 58例

検査件数 435件：脊髓腔造影 87件、神経根造影・ブロック 304件製作中